

がん化学療法科 ニュースレター(仮称) 第二号



あけましておめでとうございます 今年もよろしくお願ひ申し上げます

がん化学療法とチーム医療

さる、11月19-21日に博多にて、第4回チームオンコロジーワークショップが開催されました。このワークショップは年一回、米国・テキサス州のMD・アンダーソン癌センターから、多数の講師が来日し、がんのチーム医療の発展のため、日本全国から公募した21チームが参加して行われるものです。当院は初の応募でしたが、事前審査を通過し、箱石(看護師)、岡田(薬剤師)、加藤(医師)が参加しました。21チームは4つに分けられましたが、我々は、順天堂大学、KKR札幌医療センター、東京医科大学、虎ノ門病院、横浜南共済病院、北里大学(統計家)の方々と同じグループでした。博多で開催でしたが、参加者は21チーム中1チームを除き全て九州以外というワークショップです。

チーム医療を実践していく上での、リーダーシップ、コミュニケーション、チームの役割、ビジョン、EBM(エビデンスに則った医療)の観点から、全て英語で討議するというハードな内容でした。朝8時から缶詰状態で延々プログラムが続き、夜10時に会場を出た後、更にグループのメンバーは、インターネットカフェに移動し、討議を続け朝4時に解散。朝8時には再び会場で打ち合わせという厳しいスケジュールでした。彼らの言うチーム医療は、日本で行われているようなチーム医療とは、一見似たように見えて、異なる部分が非常に多く、中身を吟味しないと伝わらないと思います。その意味で、実際にMD・アンダーソン癌センターの先生方と直接議論できたことは、非常に有意義であったと思います。

全国から志を一つにした仲間が集まって、集中して討議するという何物にも変え難い経験でした。最終日には、討議内容を英語で発表し、厳しい質問に答えなければなりません。我々のグループは、今回集まった中でも最も活発なメンバーが揃っていたこともあり、途中の過程では、意見が百出して空中分解するのではというくらい過熱していましたが、最後には無事、うまく意見の一致を見ることができ、誇れる発表だったと思います。参加したメンバーの間では、ワークショップ終了後も、様々な問題に関して、熱心に議論が交わされています。これも大きな収穫と言えるでしょう。

12月には、院内で参加報告会を行いました。熱い気持ちを持った仲間が集まって、院内でチーム医療のプログラムを開始することになりました。最初はチームを起動するために必要な準備を進めることとなっています。また、今回の参加者は、オンコロジー・ドリームチームの一員として、本邦のがん診療の発展に可能な限り尽力することとなっています。がんのチーム医療の発展にご期待ください(文、加藤)。



R. L. Theriault先生を囲んで、我々のチームのメンターと参加者



第12回東北臨床腫瘍セミナー in 八戸 参加レポート



がん化学療法科 福田耕二

2010年12月4日 八戸地域地場産業振興センターにて開催されました。東北臨床腫瘍セミナーは、東北地方のがん医療人教育と主にながん薬物療法に関する臨床試験を通じたがん医療水準の向上を図る目的で活動している東北臨床腫瘍研究会主催であります。年2回の開催で1回は仙台、もう1回は東北各県持ち回りで開催しています。医師・看護師のみならず、薬剤師なども多数参加し、200人から350人ほどの参加人数となっています。セミナー内容もがん薬物療法の最新情報から、患者会代表者の講演・臨床心理士からの講演など多岐にわたります。第12回となった東北臨床腫瘍セミナーは、ちょうど東北新幹線の新青森駅開業と重なり、途中駅である八戸駅もさまざまな催し物が計画されており非常に華やかなムードの中で開催されることとなりました。

最初の企画は「患者さんへのベストサポートを考える」であり、はじめにらんきゅう・卵宮(卵巣・子宮がんの患者の会)代表の方から、自らの手術・化学療法の経験についての講演がありました。患者さんの悩み・苦しきは、医療従事者側の一方的な視点では気がつかないものであり、お互いに理解するためにも柔軟な見方が必要であることを学ばされました。また、岩手医科大学病院のがん患者・家族サロンでは、専任の職員(元看護師)によりいつでも誰でも相談できる環境整備しているとのことでした。臨床心理士の先生からは、患者さんが医療従事者への質問をする行為そのものが非常に勇気を要する事であり、医療従事者はそのことを深く受け止めるべきである。そして答えを伝えることのみが求められているものではないというような内容でした。

つぎに抗癌剤治療時の吐き気対策に関する内容の講演でした。講師の先生は制吐剤適正使用ガイドライン作成に携わっており、非常に標準的な内容でありながらもとても引きつけられる内容でした。適切に吐き気を制御する事で、治療を継続する可能性が高まり、これが治療効果にもつながるとのことでした。

さあ、いよいよ胃癌化学療法の最新の話題という内容の特別講演がはじまりました。近畿大学から遠路はるばる講師の先生が壇上にあがる……予定でしたが、お気づきのよう東北新幹線延線初日は強風のためダイヤが乱れて大混乱。IT化のおかげで発表原稿データだけが先に到着したものの、講師の先生は到着できず。急遽当番世話人の先生がピンチヒッターとなります。全くの予定外でありながらも、講師の先生が乗り移ったかのような見事な代役でした。注目される胃癌薬物療法としては、トラスツズマブという分子標的薬があげられます。胃癌の2割程度に対して効果が現れる治療薬で、乳癌においては実際に使用されています。治療開始前に効きやすい・効きにくいという事がはっきりするため、オーダーメイド治療に近づくとされています。

日々進歩を遂げているがん薬物療法のup to dateを勉強させていただき、数時間の会はあっという間に終了しました。その後新幹線に乗り遅れた私は、肌寒いホームにて本日の会のことを思い返しながら、一人感慨にふけるのでした。

次回第13回東北臨床腫瘍セミナーは2011年5月21日仙台市にて開催されます。第14回は秋田市での開催予定です。

繰り返すこのポリリズム



中央病院後期研修医 佐賀 雄大

2ヶ月のがん化学療法科研修を終え、まず思ったのは『やっぱりこの科を回ってよかった!』という思いでした。様々な病態の患者に触れ、非常に充実した2ヶ月間を過ごすことが出来ました。6西病棟は今までローテートした中でも(看護師さんが優しくて)かなり仕事がしやすい病棟でした。2人の先生方、看護師さん方本当にありがとうございました。

以前加藤先生と当直が一緒になった時に化学療法科をローテートさせていただけないかとお願いをさせていただくと、『協力できることがあればいつでもwelcomeですよ』と快くOKをいただきました。実際に回ってみると非常にアカデミックで、日常業務をただひたすらこなすというのではなく、カンファランスでの指導や東北大の先生・加藤先生の院内セミナー等、しっかりと教育していただき本当に勉強になりました。

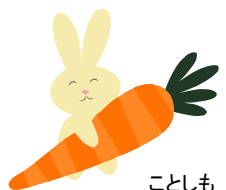
また、ユーモアがあり、一方で熱い『passion』を持った福田先生にも大変お世話になりました。しっかりと病態を分析した考察、見習いたいです。沖縄みやげの『ハブアタック』!!!!あれを飲めば先生のように熱くなれるのでしょうか?

私は将来精神科医として緩和チームに関わることになりましたが、ここで学んだことを生かしていきたいと考えています。

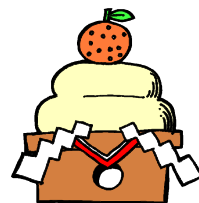
MEMO

1月のがん化学療法科の予定

1月4日 仕事始め
1月14, 28日 柴田教授外来



ことしも
よろしく



掲載記事の無断転載を禁じます